

おかめ物語

序文 じよぶん

第一話 だいいちばなし おかめと殿様 とのさま

第二話 だいにわ 日本一の折紙つき おりがみ

第三話 だいさんわ おかめさんの病気 びょうき

第四話 だいにわ 苦肉の策 くにく さく

第五話 だいにわ 彫刻師 松五郎 ちようこくし まつごろう

第六話 だいろくわ 家臣の告白 かしん こくはく

第七話 だいななわ 婿さがしの旅 むこ たび

第八話 だいはちわ 火吹男との出会い ひふきおとこ であ

第九話 だいきゆうわ 祭りの主役 まつ しゅやく

序文 じよぶん

この物語は私がお囃子を始めてから約5年程度経過した頃、父親から断片的に聞いた話を基に、物語としてまとめたものである。

この話は、実在したものか、或いは伝説なのか、又は架空の話なのかは定かではないが、いずれにしても、お囃子にたずさわる者にとっては、誠に興味深いものであり、明治・大正・昭和もすでに過去のものとなり、年号も平成と改められたのを機に、このまま昔の民話が人々から忘れ去られるのが惜しまれる一念から、つたない文章をも顧みず、敢えて物語として書きとどめて置く次第である。

第一話 だいいちわ おかめと殿様 とのさま

昔ある城下町に 一人のとても踊りの上手な娘がいました。この娘は、年が十九歳で名前
は「かめ」と言いました。

踊りは何時どこで習ったものか、或いは生まれついで天性から自分で創作したものなのか、誰一人として真実を知る人は居ませんでした。ともかく踊りは見事でその身振り、手振りのあざやかな事は、見る人の心を引きつけるに足りる充分な魅力と迫力を兼ね備えていたそうです。踊りの中でも特に、滑稽で面白い踊りが得意で、その右に出るものは居ませんでした。

その名声はたちまち城下町一帯に広がり、やがては城内にまで「かめ」の噂が伝わり、城主である殿様の耳にも達しました。

殿様は、この噂を聞いて「かめとやらの娘の踊りをぜひ一度見たい。もし気に入ればお城の専属の踊り子として召しかかえても良い」とまで言い出し、家来に命じて「かめ」をお城に招く事になりました。準備も整って、いよいよその当日がやってきました。

時は四月の上旬で、お城の奥庭に設けられた舞台には、今が盛りと桜の花が咲き誇る中で「かめ」は思う存分殿様に自分の踊りを披露しました。「かめ」の踊りは桜の花よりも艶やかで、見る人々の心を虜にしていきました。

だいにわ にほんいち おりがみ

第二話 日本一の折紙つき

「かめ」の踊りを見ていた殿様は思わず身を前に乗り出して、その身振り・手振りの鮮やかさに感銘し、「かめ」の踊りは単に、滑稽で面白いだけではなく、適度にお色気と愛らしさがあり、しかも気品すらあふれており「これぞ日本一の踊りの名手なり」との折紙をつけ、早速「かめ」をお城の専属の踊り子として召しかかえる事になりました。

以来お城では、お祝い事があつたり、或は殿様が、ご政道の問題で頭を悩ましたりしている時々など、その都度「かめ」を城内に招いては「かめ」の見事な踊りを楽しんで、ご政道に励みました。

「かめ」が城内に来る様になつてからは、お城では良い事が続き、お城は益々栄えていきました。「かめ」自身も城下町の人々から「おかめさん、おかめさん」と慕われ、その名声は、憧れた人々が「ぜひかめの弟子になりたい」との申し出が後をたたず、今では三十人を越える弟子を持つ

様になりました。

第三話 おかめさんの病気

それから数年の歳月が夢の様に流れました。ある日より突然「かめ」は全くお城にその姿を見せなくなりました。

心配した殿様は、家来に命じて「かめ」の様子を見て来るよう指示しました。家来の報告に依ると「かめ」は風邪が元で病床にふしており、起き上がれない様な大病である事が判り、殿様は大変落胆し毎日ふさぎ込むようになりました。

これを見ていた家臣達は殿様がかわいそうになり、相談の末「かめ」の弟子の中から特に踊りの上手な者を五人程選んで、殿様の前で交替に踊らせましたが、殿様は「たしかに身振り・手振りは「かめ」に似ているが顔の表情が全く違い、或る者は余りにも整い過ぎていて面白くもおかしくもない。又、或る者は顔がきつ過ぎてお色気も愛らしさもなく、ましてや気品などは全く感じられない」といつて益々ふさぎこみがひどくなりました。

家臣達は、良い試案がないものかと、ほとほと困り果てました。

第四話 苦肉の策

「かめ」の代役の踊りでは満足出来ず、益々ふさぎ込んで、政道も疎かになり殿様の様子に困り果てた家臣達は再度談合をもち、対策を協議しましたが中々良い名案がまとまりませんでした。

何回か会合を重ねるうちに、家臣の一人から苦肉の策として「かめ」にそっくりのお面を作り、そのお面を弟子の顔につけさせて、踊らせてはどうか」との案が出され、早速城内に三人居る彫刻師の中から、特に名人といわれている松五郎という彫刻師に「かめ」のお面を作る様に依頼しました。

第五話 彫刻師 松五郎

おかめのお面の製作を依頼された彫刻師 松五郎は城内で、しばしば「かめ」の踊りを見て居りましたので、すぐにお面の構想を練り、早速製作に取り掛かりました。

名人 松五郎は、もてる技術の全てをお面作りに傾注し数ヶ月を要し、自分乍ら「良い出来栄えである」と云える程の、それは見事なおかめのお面を彫りあげました。

家臣達は松五郎から受け取ったおかめのお面を早速弟子にかぶらせて殿様の前で踊らせました。殿様は、目を輝かせ乍ら此の踊りを見て「これぞまさしく「かめ」の踊りである。「かめ」の病気が治って本当に良かった。」と大喜びしました。

殿様がお面とは知らず「かめ」自身が、踊っているものと思ひ込む程優れた出来栄えでした。

第六話 家臣の告白

一方、おかめさんの病気は回復する兆候は全く見られず、返って益々重くなるばかりで、数日後に城下町の人々の願いも空しく、ついに二十三歳の短い生涯を閉じ惜しまれつつ、此の世を

去ってしまいました。

ここで初めて家臣が殿様に、あれは「かめ」のお面をつけていた踊りであった事を告白し「かめ」の死を改めて告げました。

これを聞いた殿様は、大変嘆かれ、「かめ」は此のお城の守り神であった。「かめ」の病気が直ったら良い婿を探してやろうと思っていた矢先であったが、今となつては、それも叶える事が出来なくなつてしまった。せめて、おかめのお面に相応しい男踊りのお面をぜひ作つてやりたい。」と例の松五郎にお面の製作を命じました。

殿様は、若くして此の世を去つた「かめ」を愛おしく思い、生前は何もしてやれなかつたので、男踊りのお面を作る事がせめてもの供養と考えたからです。

第七話 婿さがしの旅

殿様から、男踊りの面作りの命を受けた松五郎は、早速製作に取り掛かりましたが、おかめの面の場合「かめ」と云う良い人があつたのですぐに出来上がりました。しかし、おかめに良く似合う男踊りの面となると、いかに名人でもすぐに思う様な構想がまとまらず、何個作つても、気に入つたお面は作れず、その場で叩き壊してしまいました。

名人気質の性格から、「自分で気に入らない作品は殿様に差し出す訳にはやかない」と一時製作を中断し、殿様に「向こう三ヶ月間のお暇を頂き、諸国を廻り、いろいろな人に会つて、きつとおかめの面にふさわしい、良い男踊りの面の構想をつかんで参ります。」と申し出ました。

殿様も松五郎の心意気に打たれ、旅費を充分与えて心よく送りだしました。

松五郎は身支度を整え、いよいよおかめに相応しい、婿探しの旅が始まりました。

だいはちわ ひふきおとこ であ

第八話 火吹男との出会い

おかめの婿探しの旅に出発した松五郎は、先ず最初に縁結びの神様として有名な出雲大社に参拝し、目的達成の祈願を済ませてから、或る時は人の出の多い京の町や大阪の繁華街を歩き廻り、又或る時には人里離れた寂しい村々を尋ねて、出来るだけ多くの人に会う様に心掛けました。が、中々おかめに相応しい顔の持ち主に出会う事は出来ませんでした。

松五郎はだんだん焦りの色が見え、一方約束の三ヶ月も残り少なくなり、身も心も疲れ果ててしまいました。

思い余って最後の宿を寂れた寒村に決め、一夜明けたら明日は家に戻る事にしました。

ひどく疲れていたのです、すぐに風呂に入りましたが、あいにく風呂がぬるかったので宿の人に火を焚いてくれる様に頼みました。

やがて宿の男が来て、火吹竹を使って風呂を焚き始めましたが、口を尖らせ頬を膨らませ、目を白黒させた顔の表情が何とも云えない滑稽な顔をして居たので、思わず松五郎は風呂から身を乗り出し「探し求めているおかめの婿に相応しい顔はこれだ！」と叫び、その男の顔の表情をしっかりと頭の中で構想をまとめ、急いで家に戻りました。

だいきゅうわ まつ しゅやく
第九話 祭りの主役

家に戻った彫刻師 松五郎は、早速火吹男を手本に男踊りの面を作りあげました。三ヶ月も掛かって苦労してやっと探し当てただけに、その出来栄は見事であり、殿様も上機嫌で松五郎の労をねぎらいました。

此のお面は火吹男にちなんで「ひよつとこ面」と名づけられました。

こうして「おかめ」と「ひよつとこ」の踊りは誕生しました。

著者 柴一はやし連 加藤 光吉
作成日 平成三年五月吉日
編集者 柴一はやし連 小川 剛
編集日 平成二十二年三月吉日